

宗教にもとづく居住空間の構成



K07040 國井 昌紀

Keywords

仏教 アニミズム
空間構成 シンクレティズム

1. はじめに

1.1 研究背景・目的

世界には多種多様な宗教や信仰が存在する。主にキリスト教、ヒンドゥー教、仏教がよく知られているが、その他にも土着の宗教や地域ごとの独特な信仰が存在している。今日的にみると、人びとの宗教に対する認識は多様であり、問題の焦点を定めにくい。それをふまえながら、本研究では、ラオスの集落に注目し、居住とのかかわりのなかで宗教に言及する。

ラオスを含む東南アジアでは、仏教とともに、アニミズムを信仰する人びとが多い。現在ラオス国内では、約60%の人々が仏教を信仰している。しかし、多くの民族集団が居住するラオスでは、それぞれが独自の宗教を信仰している。東南アジアに広く分布する民族集団は、アニミズムにもとづく霊的存在を重要視し、祖霊や開村者の霊などを村の守護霊として祀っていることが多い。そのような人びとが暮らす集落には、信仰にかかわるさまざまな事象がみられる。それは、寺院や祠のような象徴的なものである場合もあるが、そうでないことも多い。なんの特徴もない住居の間が特別な空間として認識されるなど、集落に暮らす人びとにしか理解できないこともある。

本研究では、宗教に注目しながら、居住空間に与えられる意味合いを探る。そのうえで、宗教と建築形態にどのようなかかわりがあるのかを提示したい。

2. 研究方法

本研究は現地調査を基にしている。調査期間は2010年9月4日から10月3日の計30日間である。

調査の内容は、住居の平面図、立面図、断面図、屋敷図を採集した。その上で、生活物品、部屋の使い方、名称、祭壇の有無など住居内部の空間構成を把握する。さらに寺院でも同様に実測している。また集落の人々と僧

に対してインタビュー調査をおこなった。主な聞きとり内容は、家族構成、宗教、耕作物、家畜、住居、就寝形態、食事形態などである。

1.2 調査地概要

ラオス低地部では、多くの人々が上座部仏教を信仰している。集落では仏教寺院が建立されており、出家活動が盛んである。

また、ラオスには49の民族集団が存在している。それぞれの民族集団が独自の文化的特徴を有し、多民族国家と特徴づけられている。

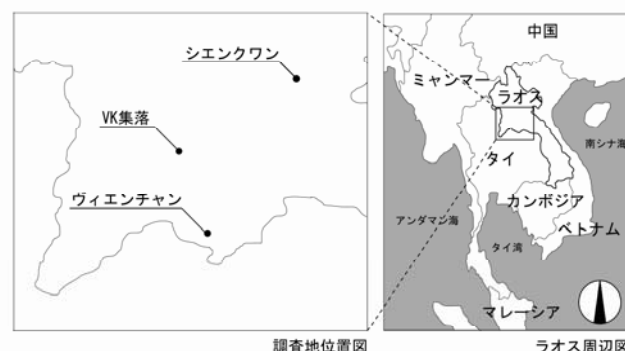


図1 調査対象地

調査対象としたVK集落では、ほとんどの人が仏教を信仰しており、集落内の中央に寺院が建てられている。一年をとおして、仏教にかかわる儀礼がおこなわれ、集落のほとんどの人が参加する。しかし、仏教を信仰するのと並行して、アニミズム(59%)やパム(バーシー)(23%)が信仰されている。バーシー・スー・クワンとは、古来からの民間信仰とヒンドゥー教および仏教も関与する信仰形態であり、クワン(魂)が体外に飛び出してしまうと健康を損ねたり、不幸なことが起きたりすると信じられてきた。

本研究では、その具体的な様態を提示する。1972年には道ができ、2006年には舗装されたという経緯で現在にいたっている。

3. 信仰と集落空間

3.1 仏教

調査期間中には、ワンシン (wang shing) とよばれる仏教儀礼の一種であるカオサラ (khao salah) に立ち会うことができた。カオサラとは、旧暦の10月、新月、満月の日におこなわれる儀礼であり、五穀豊穡を願う。カオは米、サラはくじという意味をもつ。

寺院での儀礼が終わると、宴会がもよおされ、人びとが談笑するための場となる。

3.2 アニミズム

VK集落には複数の霊がいるとされている。

1年から3年に一度、ピーバーン、ピールゥアンとよばれる霊に供え物をする慣習がある。豚などの家畜を集落の境目に供える。村人は旅の安全を願ったり、災いが起きないことを願う。この霊は村人の守護霊とされている。

また、ピーとよばれる霊もいるとされる。ピーは悪霊であると同時に善霊でもあり、人々の生活を守護すると同時に、不敬なおこないに対しては祟ることがあるという。

集落空間は、死霊が集落へ侵入するのをふせぐため、墓を南から北に向かって並べるなどの措置がとられている。死霊は集落内のみちを通るとされる。私有のみちや、細いみちではなく、集落の中心をとっている主要なみちを通る。

4. 信仰と住居空間

4.1 祭壇

VK集落の住宅には、祭壇がもうけられている場合がある。祭壇のある住居は61戸中24戸にみられ、祖霊が祀られている。これはアニミズムにもとづくものである。祭壇は、家長が就寝する寝室に置かれていることが多く、家長だけが触れることができる。

24戸中21戸の住居で、祭壇は寝室にあり、住み手が就寝する際の頭の方に置かれていた。それは、頭にはクワンが宿っており、身体の中で最重要部位とされているからである。

4.2 就寝形態

頭は身体の最重要部位で、聖域とされておりクワン(魂)が宿っているとされている。そのため、頭の側には立ってはいけない、人が通るところに頭を向けて寝ては

祭壇の位置

		戸数	平面事例
寝室に祭壇がある	21		vk-24
	3	その他	vk-40

就寝場所

		戸数	平面事例
男性が左側で就寝 寝室に祭壇がある	24		VK-28
	20	男性が右側で就寝	VK-19
その他	16		VK-25

図2 祭壇の位置と就寝場所

いけないという慣習がある。また、外部の人は寝室に入ってはならないともいわれる。就寝形態をみると、その慣習が守られていることがわかる。

また、61戸のうち、44戸では、男性が住居の入口に近い場所で就寝していることがわかる。この場合、階段を昇る方向と平行にして就寝している住居が多い。

4.3 サオニャー

炊事場の炉の近くにサオニャー(sao nyaa)と呼ばれる柱がある。この付近は、子供や住み手以外の人は通ってはならない。サオニャーにはニャーハイカーオ(nyaa hai khao)と呼ばれる霊が祀られている。

村人たちは正月などの儀礼の際、米や蒸した鶏を柱に貼り付ける。供え物をしないとニャー(おばあさん)が空腹になり住人に病気をもたらすとされている。供え物をしている限り、住人が健康に生活できると同時に、他の霊が入らないように住居と住人を守ってくれるという意味もある。サオニャーがあるのは61戸のうち53戸であるが、残りの8戸は建替や引越をするために、今はないがいずれつくる予定である。

このことからVK集落ではサオニャーが非常に重要な部材として認識されていることがわかる。住居内に霊が入ると災いが起きるとされ、サオニャーによってそれを防ぐ。このことから、精霊信仰が強く根付いていることがわかる。

5. 信仰の表象と身体の関係

これらのことをふまえると、住居空間では仏教にかかわる事象が明確にみられない。ところが、集落全体では、仏教儀礼は盛んにおこなわれている。仏教儀礼の際には、寺院に大勢の人があふれ、人びとの交流の場となる。しかし、日常生活という観点からみると、仏教にかかわる事象はほとんどみられない。

いっぽう、アニミズムにかかわる事象は、日常生活をみてもさまざまなかたちでみられる。頭の向きに祖霊を祀っている祭壇を置いていたり、サオニャーを重視したり、人がとおるところに頭を向けてはいけないなど、人々の生活に密接にむすびついた慣習が多い。

前述の通り、VK集落では、仏教とアニミズムが並行して信仰されていることがわかる。しかし、双方に対する人々の認識は同等ではない。仏教を信仰対象とする人々の認識は、寺院の建立や儀礼へ参加することなどか

ら明らかである。いっぽう、アニミズムは、健康祈願、就寝形態、病気を患ったときの治療法など、日常生活や身体にかかわることが多い。このような様態は、身体化された生活様式としてみるができる。

6. 宗教観念を反映する住居空間

住居空間には、アニミズム信仰にかかわるものとして祭壇とサオニャーがもうけられている。これらは、VK集落では非常に重要なもので、住居をかたちづくる不可欠な要素ともいえる。

前述の通り、祭壇は祖霊が宿るもので、世帯にとっては重要な存在である。同時に、住居空間にある種のヒエラルキーをあたえている。家長である男性は、村落社会における世帯の象徴である。祭壇が置かれる場所は、家長が就寝する場所であり、住居の中で、集落という社会空間にもっとも近接している。

いっぽう、全ての住居に共通して、炊事場は戸口からみて最も奥側に位置している。前述の通り、炉をふくむサオニャーの周辺は、住み手以外は通ることができない。このことから、世帯に占有される空間であるといえよう。これは集落空間ともっともはなれた空間ともいえる。

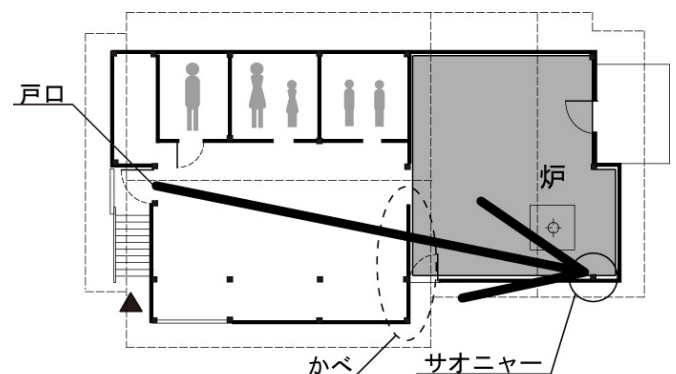


図3 戸口とサオニャーの位置関係

7. 集落空間と住居空間

このように、VK集落の住居空間は、集落空間をとの連続性の中に構成されている。ここで、VK集落を貫くみちと住居の関係性をみる。みちから一番近いところに、戸口がある。そのため、炊事場がみち側に向いている住宅はほとんどみられない。

先に述べたように、病気の原因はピーとよばれる霊の仕業だと考えられている。死霊は集落内のみちを通るといわれている。これらのことから、住居内および炊事場への霊の侵入を避けているということが考えられる。

(図3)

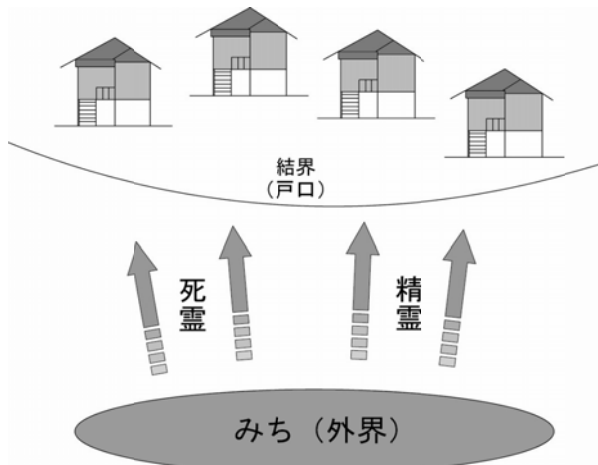


図4 みちと住居の境界

戸口とサオニャーの位置関係を集落空間に照らし合わせると、集落の全体をつつみこむような領域が浮かび上がってくる。集落の北端に位置している住居では、戸口からほぼ北側にサオニャーが位置している。さらに集落の南端に位置している住居では、サオニャーはほぼ南側に位置しているのがわかる (図4)。

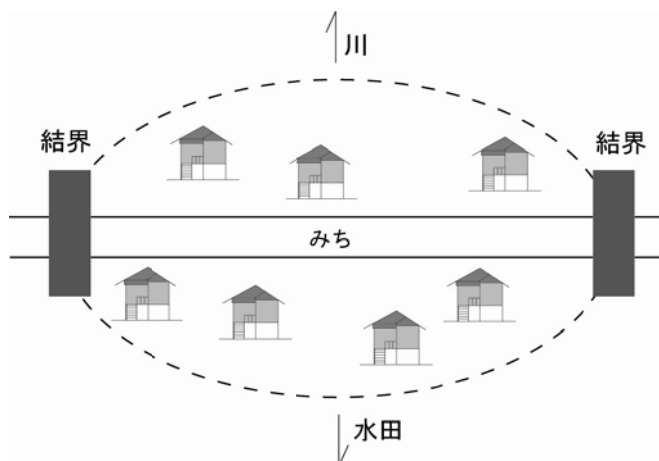


図5 集落空間の境界

集落の北端と南端の住居で、サオニャーを北側、南側に位置付けることで、集落空間をとりかこむ境界をつくりだしている。この境界は、集落の領域を示すとともに、集落外部からの霊が侵入するのをふせぐ役割もになっているという。霊的存在に対する考え方に従えば、このような境界＝結界をつくることによって、集落全体をひとつの閉じた空間にしている。これは守護霊とされるサオニャーの役割にもあてはまる。

8. 居住空間のシンクレティズム

8.1 シンクレティックな居住空間

仏教はラオスの国教とされ、ほとんどの人が信仰している。ラオスを含む、一般的な仏教国は、出家活動が盛

んであり、ほとんどの住居には仏壇や、仏教にまつわるもの、慣習が存在する。しかし、VK集落の住居には、仏教にまつわるものがない。このことから、VK集落の人びとは、もともと仏教を信仰していなかったのではないかと考えられる。かれらは、現在の状況に至るまでに環境的にも社会的にもさまざまな経緯を経ている。その過程は、集落内の問題ばかりではなく、外部社会＝国家、行政とのかかわりも含まれている。その過程で徐々にラオ人としてのふるまいや価値観を受け入れている。仏教もそのひとつであり、現在の様態はラオ化の過渡的な状況を示していると考えられる。

このような見方をすると、仏教＝表層：アニミズム＝深層と位置付けることができる。このような社会のシンクレティックな状況は、集落のような小さな社会に起こりうる特徴的な現象であると考えられる。これは、多民族国家であるラオスの特徴ともかかわる現象である。

8.2 選択される宗教

VK集落の人びとは、国教である仏教を表層的に受容し、ラオス国民としての自覚も強い。しかし、生活の実態はかならずしも仏教徒のそれではない。生活にはさまざまなかたちで、アニミズムにかかわる事象や現象があらわれる。これは、かれらがアニミズムに基づく世界観の中に育ってきたからだと考えられる。帰属する社会文化的な状態は、容易に消え去ることがない。独特な民族文化が世界中に現存しているのもそれを示唆している。

ラオス国内では、近年、国家とその周縁諸社会のあいだに、さまざまな関係が生まれている。VK集落も例外ではなく、外部社会との関係がみられる。VK集落の社会組織は、ほかの集落とのむすびつきをつくると同時に、地方行政との関係も強めている。

このような過程を経て、村落社会は、地方行政、国家との関係性を深めていく。近年、周縁社会としての村落は、このように行政とのかかわりのなかで位置づけられる。その過程で村落の居住環境はさまざまな様態を示す。本研究が着目する宗教と居住空間の関係もその様態の一側面だと考えられる。

参考文献

- 1) 林行夫『ラオ人社会の宗教と文化変容 ～東北タイの地域・宗教社会誌～』、京都大学学術出版会、2000
- 2) ラオス文化研究所『ラオス概説』、(株)めこん 2003
- 3) 桃木至朗ほか『東南アジアを知る事典』、平凡社(株) 2008
- 4) 石川栄吉ほか『文化人類学事典』、弘文堂 1994